

自己評価をとり入れよう

新しい指導を考える会

書写の自己評価を、授業の最後に少しだけ行って終わりにしていませんか。書写の本を読んでも少ししか載っていないので、「自己評価はそんなに重要ではないのでは」……と思われる方もいるかもしれません。自己評価をきちんと行くと、子どもたちが主体的に、考えながら学習に取り組むようになります。ぜひ積極的にとり入れてみましょう。

1 自己評価の問題点

書道での臨書のひととき。
一枚書きあげては、手本と見比べて、「あそこが違う」「筆使いが悪い」「字形が気に食わない」……繰り返し返していくうちに一時間、二時間と時間が過ぎていきます。自分に謙虚になれる至福の時間です。よく考えてみると、臨書にせよ、創作にせよ、一枚書きあげるたびに、自己

- 4 自分の能力はこの問題を解くのに十分であるか。
 - 5 どこに短所があるか。
 - 6 いま目標のどの位置にいるか。
 - 7 結果を整理してあるか。
 - 8 どのように変化したか。
- といった諸点について、自分自身の反省と評価を行なうことになる。

五十年ほど前の資料ですが、まったく古びていません。でも、これだと、「あれもこれも」状態に陥って、自尊心は失われていきます。

一方、『書写指導の方法』（光村図書出版）によると、

「自己批評」とは、自分が書いたものを基準に照らして評価し、適切な部分で改めること。批評に代えて、「評価」「吟味」「診断」などの語を用いることもある。

これはどうでしょう。「基準に照らして評価」することによって、「あれもこれも」状態には陥らずに済みます。観点を一つか二つにとどめることが自己評価のポイントです。

評価をして次の書字に取りかかる……これは、Plan→Do→Check→Actionの「PDCAサイクル」そのものではないでしょうか。しかし、趣味の書道の世界とは違い、書写の授業は四十五分間しかありません。その中で練習できる時間は、最大限三十分、普通に考えれば二十分程度です。
書写の「練習」は、教材文字を何回も書くストイックな活動になりがちです。書道の練習のように常に自省を求めるよ

3 自己評価の具体例

さて、自己評価は実際にどのようなようにしたらよいでしょう。書写の授業で、自己評価は、「まとめ」の最後に行うのが一般的です。学習全体を振り返って、左のような書写カード（※1）を利用したり、教科書や書写ノートの振り返り欄を利用したりということがよく行われています。

1…書写カード

書写カード		年 組	番 名前	月 日	曜日
5	自分の課題	1	「もんがまえ」はたてにほぼ二等分に書く。	感想	
4	「もんがまえ」と中の部分は中心が同じになる	2	「もんがまえ」は右側をやや大きく書く。		
3	「もんがまえ」の中は小さく書く。				

うな活動をしていては、粘り強さが低下してきた今の子どもたちにとって「書写嫌い」を生み出すことにつながりかねません。毛筆を始めたばかりの三年生は書写が大好きなのに、学年が上がるにつれて書写嫌が増えていく……。技能面がほとんど身につかないまま進級していくことだけではなく、書写のもつこのネガティブな一面が書写嫌いを生む要因になってはいないでしょうか。
やみくもに自己評価を繰り返すならば、「折れの筆使いがだめだ」「三画目が少し長くなった」などなど、あれもこれも広げてしまい、自尊心が失われることも少なくありません。

2 自己評価とは

書写における「自己評価」はどういう意味で使っているのでしょうか。『現代の書教育』（上條信山著／木耳社）によると、

- 1 自分の向かうべき目標は何か。
- 2 自分はましがいなく目標に進んでいるか。
- 3 自分の計画は正しいか。

このように、本格的な自己評価は、まとめの段階で行いますが、さらに左図のように、「試し書き」をした後に自己評価を行い、それをもとに自分の課題を決めたり、練習するたびに手本と見比べて自己評価をして次の練習に取り組んだりすることも可能です。

第1次 「知る」ために書く	①ねらいを知る ②課題を見つける ③基準を知る	ここでも自己評価
第2次 「解決する」ために書く	①試し書きをする ②自分の課題を決める ③練習する ④まとめ書きをする ⑤評価をする	ここでも自己評価 自己評価
第3次 「応用する」ために書く	①ほかの文字を調べる ②硬筆の学習を生かして硬筆で書く ③評価する	自己評価

